神戸新聞より著作権の許諾を得て掲載

編集委員インタビュー

明治大学情報コミュニケーション学部准教授　島田　剛さん(52)　に聞く

緒方貞子さんが遺したものは

日本人初の国連難民高等弁務官として活躍した緒方貞子さん＝享年92＝が亡くなり、10月22日で丸2年が過ぎた。復興へ向けて応力したアフガニスタンではタリバン政権が復活し、時代が逆戻りしたような状況が続く。混迷する国際社会で今、どのようなリーダー像が求められるのだろうって、緒方さんが貫いた「現場主義」や「人間の安全保障」の意義とは。国際協力機構（JICA）の理事長時代、秘書チームのトップとして、緒方さんを支えた明治大学情報コミュニケーション学部准教授の島田剛さん52＝国際経済論＝に聞いた。（松本寿美子）

緒方さんとの関わりは、いつごろからだったのですか。

「JICAの理事長だった2005年、コフィ・アナン事務総長の招きで国連総会に出席された時です。私はJICAから外務省、さらにニューヨークの国連日本政府代表部に出向し、途上国開発担当の1等書記官でした。出張で来られるたび、滞在中の会議などの調整を担い、その後JICAに戻ってから秘書チーム長になりました」

「既に国連難民高等弁務官として活躍された後でしたから、最初は緊張しました。空港で『あなたは国連で何をしてるの？』と聞かれたことに始まり、質問攻めでした。趣味でされていたテニスのサービスターンをいつも自分がいない場所に打ちこまれるように鋭く、まるで大学のゼミの先生のようでした。そして、いつも目の前にいる人を大事にし、よく話を聞いていましたね。国連本部と川の警備員や ホテルの従業員に

印象深く思い出されるのは、どんなことでしょう。

「秘書役になり、英国で『紛争予防』がテーマの研究会に出発する前、冒頭のスピーチを用意するように言われました。自分としては渾身の思いで書いた原稿を金曜夜に渡すと、月曜に『あれ、あんまり良くなかった。大変だったわよ』と言われ、スピーチ原稿を大幅に書き直されていました。それは今読んでも緊迫感に満ち、それまでの開発援助のあり方を鋭く問うものでした」

「例えば（1994年に大虐殺が起こった）ルワンダ内戦では、植民地時代からの経緯だけでなく、援助する側に政治や社会の大きな流れを読み取る能力や気持ちがなかったことによって情勢が悪化する危険性を見逃した、と指摘されていた。驚きました。国連時代の実感からでしょうが、開発援助機関のトップで、そこまで踏み込んだ議論をされた方は初めてだったのではないでしょうか。現場をもっと知らねばならないという戒めでした」

東京都千代田区、明治大学

国連難民高等弁務官として防弾チョッキ姿でボスニア・ヘルツェゴビナを視察に訪れた緒方貞子さん＝1992年7月、サラエボ空港（共同）

現場、人を大切にした／責任取るリーダー像体現

緒方さんは「現場主義」で知られていました。湾岸戦争下のイラクでは、退避を受けて国境付近に逃れた「国内避難民」のクルド人を「難民」と認め、救援に踏み切っています。

「従来の国連難民高等弁務官事務所の定義では国外に出ていない彼らは難民ではないですが、緒方さんは普段から『現場を見たら前かせずにいられないでしょう。で、あなたはどうするの』と。単純だけど一番大切なところを聞いてこられる。だからこそ、人の心を打ち、世界を動かした。曽祖父の犬養毅元首相が軍部に暗殺されたことから、なぜ日本は戦争に傾いていったのか、政治学者として政策決定過程を研究されていました。著書では『無責任の体制』と表現されています。つまりリーダーが誰も責任を取らない、と。じゃあ翻って、自分はリーダーとして何を決断すべきか、国家はどうあるべきかと考えられたのでしょう」

島田さんは経済学者です。開発援助のアプローチのあり方などで、やりとりしたことはありますか。

「緒方さんからは『日本は戦後経済成長できたのに、なぜアフリカはできないかを調べてほしい』と言われました。夫で日本銀行理事も務められた緒方四十郎さん（故人）にも相談されていたようで、『経済における国家の役割とは何か』という問題意識がご夫婦の間で通底していた。あるとき空港に向かう途中で、3人で昼食にそばを食べていると、2人から真剣な質問攻めに遭いまして。こちらは返答するのに精いっぱいでした」

「四十邸さんは、93年に日本政府が資金を出して『東アジアの奇跡』が出版された時の立役者です。この世界銀行のリポートは今なお、経済学会で高く評価が放っています。当時の世界銀行は『オリベラル的に『市場にすべてを委ねるべき』という立場でした。一方、四十邸さんは『経済成長をしづつ、格差の少ない社会を実現するには国の役割が大切だ』と唱えておられた。『取り残される人がいてはいけない』という点もご夫婦で一緒でした」

緒方さんが実現に尽力された「人間の安全保障」にも通じます。

「私も同じ考え方です。いきなり途上国の企業が先進国の大企業と自由競争で争っても無理があり、ある程度、力がつくまで支援する必要がある。ルワンダ内戦は、80年代にアフリカで市場の自由化が進んだ際に特産品のコーヒー価格が一気に下落し、景気が急激に悪化したことが要因の一つとされています」

「私が今、自分なりに緒方さんの『現場主義』、『人々に寄り添う』というご遺志を継いで、アフリカで取り組んでいるのが、日本の『カイゼン（改善）』の研究と普及です。生産性が上がれば、その分を現場の労働者側に分配する。日本経済が成長した要因は、この『カイゼン』がしっかりなされてきたことにある。確かに市場にすべて任せた方が経済は成長するかもしれないが、分配がおろそかになります」

島田さんは「人間の安全保障学会」の理事を務めています。アフガンでのタリバン政権復活をどう見ていますか。

「私はアフガンの専門家ではありませんが、首都カブールがあれほど早く陥落するとは思わなかった。タリバンを支持する人も一定数、いたということでしょう。私も含め、もっと現場を知らないといけないということだと思う。『人間の安全保障』は国境の枠に関係なく人々に寄りそうという考え方で、緒方さんは実務の現場でこれを生かし、輝かせてほしいと願っていた。経済学でも、経済全体と個人を切り離すことはできない。フェアな経済とはどういうことか、を考えることが求められる。それは人間一人一人をいかに大切にするか、につながっていくのだと思います」

しまだ・ごう　1969年神戸市生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了、博士（学術）。研究分野は国際経済学など。国際協力機構（JICA）職員、国連日本政府代表部経済部などを経て、2018年より現職。